

～モデル革新プロジェクト(企業評価編)～

《成長性評価モデル》

日本リスク・データ・バンクは、本来の事業金融の視点で
《キャッシュフローの成長性》を評価するモデルを構築いたしました

《成長性評価モデル》は、《格付モデル》のような「評価期間1年のデフォルト判別モデル」と異なり、「長期の時間軸（6年先）でキャッシュフローの成長性を評価するモデル」です。

《成長性評価モデル》は、キャッシュフロー系の指標を中心に構成したシンプルな構造で、解釈性が極めて高く、銀行員が企業や事業の成長性を理解するのに非常に有用です。

《成長性評価モデル》の最大の利点は《格付モデル》とは異なる視点から企業を評価する点。すなわち、「信用力」と「成長性」の関係性を長期の時間軸でつまびらかにしてくれます。

日本リスク・データ・バンクのデータベースは、以下の事実をあきらかにしています。

- ◆《格付モデル》の評価が高い先は、短期的にはデフォルトリスクは低いが、長期的には信用力が低下し、事業は成長しない（縮小する）
- ◆《成長性評価モデル》の評価が高い先は、短期的にはデフォルトリスクは高いが、長期的には信用力は良化し、事業は成長する（拡大する）

この事実はいったい何を示唆しているのでしょうか？

《格付モデル》に過度に依存した融資業務運営は、短期的には資産の健全性を維持できても、長期的にはポートフォリオの縮小とクレジットクオリティの悪化を招くということです。

これこそが、《金融検査マニュアル》に囚われ続けた時代の帰結なのかもしれません。

若年化や人員減少により、融資現場における事業金融の知見は急速に失われつつあります。

「信用力」と「成長性」をしっかりと評価、議論できる枠組みを融資業務に組み入れる。

取返しがつかない事態を避けるために残された時間は、もう僅かしかないのかもしれません。

(続く)